# 働くことの意味
## ―教職総合演習への一試論―

# Meaning of Working
## ―A Preliminary of Training Course in the Teaching Profession―

右　山　忠　史
Tadashi Migiyama

I first considered what is production and what it means to person.

After the reflection, I thought I would take a stance on the meaning of the right industrial training education. It would be risky just to argue that internship is necessary without posing and thinking through the question ―what is production. That would create a crisis in education as well as to human nature.

The thinking up until now is:

● We cannot get out of depression without stimulating the economy.

● Consequently, to make a nation prosperous we must foster a greater number of capable producers by encouraging industrial education more.

Industrial education based on the above views fundamentally takes the approach that person is a means of achieving an economic objective.

But I believe we must consider industrial training education with the view that every person is an important being that cannot be traded for anything else.

I believe that the issue we must first deal with is to establish our views on life and person. Based on those views, we will be able to take our stance on industrial training education.

### 序

第一法規社の新教育学大辞典をひくと、産業教育とは、「農業、工業、商業、水産、家政、などの生産的な職業に従事しようとする青少年にたいして課せられる教育を指す。」とあり、「有能な生産者を教育するのが産業教育の眼目であって・・・」（注１）と記されている。この記述は一見きわめて簡単明瞭で、なんら疑問の余地のないものであるかのように見える。しかし、もし産業教育の意義、正しいあり方を徹底的に考えてみようとする場合においては、この記述は決して明瞭でなければ十分でもない。というのは、この記述の中に「生産的、生産者」という語が使

用されているが、「生産」とはいったい何であるのか、「生産」とはいったいどういうことであるのか、ということがさらに問われるべきであるからであり、かつその問いに対する答えの相違によって、産業教育はどのようにもその性格を変えうるからである。

生産とはいったい人間の何であり、生産とはいったいどういうことなのかということを考察し、そこから正しい産業教育の意義、ありかたをとらえるということをまず第一に考えていきたい。方法技術的な問題を考えるのはその次である。

生産とはなんであるかの問いを十分に考えることなしに、むやみとインターンシップの必要性が政治家や実業家たちによって主張されていることは、むしろきわめて危険なことである。それは教育の危機であり人間性の危機を示すものである。なぜなら、「とにかく産業を活発にしなければ不況から脱出できない。したがって、国を富み栄えさせるためには産業教育を盛んにして多くの有能な生産者を養成しなくてはならない。」というような見地から推測される産業教育は、その底に、人をかけがえなき唯一無二の存在と見ずに、手段とし利用されるべき（物・それ）と見る考え方を蔵しているからである。そのような産業教育は、結局は、競走馬を調教したり、犬に芸を仕込んだりして何人かの用に供しようとするのと同じように、青少年を調教したり仕込んだりすることにほかならないのであって、人間の尊厳をこめて称えられるべき「教育」という名には価しない。

大企業の産業教育がどのように徹底したものであろうと、アメリカの産業教育施設がいかに完備したものであろうとそれをうらやんだり、真似たり、競争心を起こしたりする前に、まずわれわれ自身の確固たる人生観・人間観を打ち立て、それに基づいて産業教育の正しいあり方を定めることが先決問題であろうと思われる。

## 1

産業教育が、単に眼前の社会経済上の要請に基づいた「仕込み・調教」に過ぎないならば、われわれはこれに対して反対を表明するのに多言を要しない。しかし、事態はそれほど簡単ではない。というのは、実業家や政治家はいざ知らず、教育者という肩書きのつく限りのものは、同じく産業教育の必要性をとなえても、一応その産業教育をそれぞれが抱く理想的人間像に向かって個々の人間を形成してゆく全人間教育の一環として意義づけているからである。

多くの産業教育論がその立論の基礎においている人間の本質的規定が、ホモ・ファーバー（homofaber）だと思われる。産業教育に限らず、近年特に大学で盛んなインターンシップは、すべて、このような工作人的人間観、すなわち、人間とは「考える」存在であることにとどまらず「作る」存在であることを立論の基礎としている。しかし、この場合の「作る」はどういう「作る」でなくてはならないのであろうか。

「作る」という語を最も広義に解し、真珠貝が真珠を作り、珊瑚虫が珊瑚を作る、というような作るをも含めるならば、われわれは生きている限りは、不断に何かを作り続けている。作って

いることがいきていることであるといってもよい。例えば、呼吸することによって炭酸ガスを作り、食物を消化することによって糞尿を作り、歩くことによって足跡を作り、暖をとることによって石灰ガラを作っている。しかしおそらく今あげたような作るは、人間の本質を規定するところの作るではありえない。紙を作る、木材を作る、テレビを作る、というような場合の作るだけが該当する作るであろう。つまり何らかの役に立つもの、価値のあるものを作る場合の作るでなくてはならない。ところで、この限定された意味での作るをあらわす言葉が「生産」である。（例、平凡社の哲学辞典には「生産＝人間の生活に必要な物質的財貨、たとえば衣食住に必要なものをつくることである」と定義されている。）

「人間の生活に必要な財貨をつくることが生産である。」という定義は、ごく当たり前のことのようで疑問の余地のないように見える。しかし少し突っ込んで考えてみると、疑問がでてくる。

そのわけは次の通りである。われわれの生活は勿論衣食住ばかりではない。趣味娯楽も生活であるし、研究もボランティア活動も生活のうちである。われわれが生きてなしつつあること一切が生活であるならば、生活に必要な物質的財貨とは、実に広範なものを指すことになるであろう。結局この世界においてあるところの一切のものが何らかの意味で、人間の生活に必要な財貨だということができる。米や木綿や木材は勿論のこと映画も図書も絵画も生活に必要な財貨であるし、酸素も電気も必要な財貨であれば、音楽の演奏も学術講演も（空気の振動と考えれば物質的なものだから）やはり必要な財貨だというべきであろう。さきには、炭酸ガスを作ったりするような作るは生産とはいわないというようにのべたが、石灰ガラは決して人間にとって全く無用なものではないから、（石灰ガラはぬかるみに敷くものとして、生活に有用でありうる）そうすると、やはり人間の試すことは一切は生産活動であるといわねばならないことになる。つまり、ストーブに石炭をくべているのは、燃えガラを生産しているのであり、食事をしているのは人糞を製造しているのである、といわなければならないことになる。

要するに、このような生産の定義の仕方によっては、広義の「作る」と「生産する」の区別は明白にならないのである。生活ということを衣食住に限定しても同じことである。結果として生じたものに即して生産を定義すること自体に誤りがあるのである。

先に私は、真珠貝や珊瑚虫の例を挙げたが、それらも、結果として生じたものから見れば、人間の生活に有用なものを作ることであるが、だからといってわれわれは真珠貝の営みを生産活動と呼ぶことはできない。そのことと、石炭がらを作ったりすることを生産と呼びえないのとは同じ理由に基づいている。というのは、どちらの場合も、結果からのみ見るならば、生活に必要な財貨をつくる営みに相違ないが、それはいずれも、作ろうとして作ったのではない。自然必然的に生じたのであって、目的的・意図的に作り出したのではない。生産活動と呼び得ない共通の理由はそこにある。

そのものを作ろうと意図してつくるのでなくては生産とはいえない、という命題は、これを具

体的な事例に当てはめると、次のようなことになる。
例えば、大工場の部分的な製造工程のために労働して、全く習慣的機械的に（昨夜見た映画のことでも考えながら）手を動かしているだけのものは、生産活動を行っているといえるであろうか。金を儲けよう、日給にありつこうという目的のみが念頭にあって動かした手が、たまたま自動車の部品を作ったとしても、それを生産活動と呼ぶことはできない。もし、それをも生産活動と呼ぶならば、戦時に空爆をして殺傷する目的で投下した爆弾が、たまたまダイヤモンドを掘り起こしたことも生産活動と呼ばれなければならないことになろう。

**2**

そこで考えなければならないことは、次のことである。すなわち、一体われわれの推進すべき産業教育とは結果的に生産でありさえすればよい産業教育なのか、それとも、その目的において生産である活動としての生産教育なのかということである。もし前者でよいならば、それは一定の技術訓練の教育で十分であろう。そうして後は報酬なり名誉なり賞罰なり強制なりによって、生産？する人間ができあがるであろう。

そのようなインターンシップ教育を含めて産業教育は、馬や牛を訓練して、ものをつくる方法にするのと同じように、学生・生徒を単なる方便・手段・道具に仕立て上げる教育であって、決して学生・生徒のための教育ではない。目先の社会や地域社会の要請から出発する産業教育は、まさにこのような、人間飼育・人間調教的な産業になる恐れがある。私は、このような教育に反対する。人間教育としての産業教育は、生産の手段、道具としての人間を作る教育ではなく、生産の主体の教育でなくてはならない。サラリーが目的でなく、物をつくこと自体が目的であるような人間、作ろうと意欲してつくる人間、への教育でなくてはならないと思われる。

社会や地域社会の要請より出発すべきではないとのべたが、しかし、実はこのような人間のための産業教育であってこそ始めて社会も地域社会も豊かになりうるのではなかろうか。人間調教的産業教育は社会を豊かにするかのように見えて、実は衰退させるのではなかろうか。価値のあるものが作り出されはしないのではなかろうか。

**3**

自然必然的な結果として物がつくられるのは生産ではなく、目的意図的に物が作られる場合のみが生産である。このことは一応確かであるとしても、しかしただそれだけでは、生産の何であるかを十分に明らかにしたことにはならない。

なぜなら、そもそも生産という語は、消費という語に相対する語であるが、およそ人間の所為においては、あるひとつのものを作り出すことは、必ず同時にあるものをなくすることにならざるをえない。人間は、無から有をうみだすことができないので、このことは人間の所為の宿命である。もしこの作り出す面を生産、無くす面を消費と仮に名づけるならば、生産は常に同時に消費であり、消費は常に同時に生産であるといわなければならない。ところが、われわれは通常ひ

とつの活動を、生産活動とするか消費活動とするか、ともかくそのどちらかに見なすのである。ではいったい何によってその区別をつけるのであろうか。まず考えられることは、生活に必要でないものを無くして生活に必要なものを作る場合が生産活動で、その反対が消費活動だ、という区別の仕方である。ところが、酒を作る場合に無くする米にしても、米をつくるために使われる肥料や、耕作者のエネルギー源にしても決して生活に無用なものではない。前項でのべたように、この世界に存在するところのもので、何らかの意味で広義の生活の役に立ち得ないものは一つもないといいうるのである。したがって、上の区別の仕方は無意味とならざるを得ない。

では、これに少し修正を加えて、比較的無用なものを無くして、比較的有用なものを作るのが生産活動で、その反対が消費活動だと考えたらどうであろうか。しかし一見穏当な考えのように見える、この区別の仕方も、個々の具体例に即して考えてみると、きわめて不都合であるように思われる。というのは、米と酒、電気と鉄、ダイヤモンドと水、餅と絵、のいずれがより有用であるかということは、実は答えることができないからである。人はそれぞれにより、時により、所によって、どちらがより有用かの断定は異なるべきものであって、ダイヤモンドは何人にとってもいついかなる所においても水より有用だとは限らない。そうなると、ひとつの活動が生産活動であるか消費活動であるかは、ひとそれぞれにより時により所によって異なった判断がくだされることになるであろう。また、昨日の私が生産活動とみなしたその同じ活動が今日は消費活動とみなされるというような場合も起こってこよう。例えば、昨日は石炭ガラより石炭のほうがより有用であったから、石炭をストーブにいれた昨日の私の活動は消費活動であったが、今日はひどく道が悪いので燃えガラのほうがより有用である、したがって、昨日の私の活動は、生産活動であった、ということになろう。

このように、生産と消費が人により時により所によって入れ替わってしまうということは、「このような活動は必ず常に生産活動と呼ばれるべきであり、このような活動は必ず消費活動とよばれるべきである」、というような基準はありえないということである。

とすると、どのような人間に形成することが生産人を作ることであり、どのような活動を行うよう導くことが生産することへの教育であるかを、いかにして知ることができるか。

## 4

ひとつの活動が生産活動であるかを判断する、不動の基準が見出されなかったのは、活動の結果として作られた者から、生産消費を識別しようとしたからである。

われわれはここで眼を転じて、活動の意図を見なくてはならない。その活動が何人のための活動であるかを考えてみなくてはならない。

われわれの意図的な活動は、自分自身のためになされるかのいずれかであって、その何れでもないというようなものはあり得ない。作り出されるべきものを与えささげる相手は、自分自身であるか、それとも他者であるかのどちらかである。

もし与えられるべき相手が「他者」（注２）であるならば、作り出されるものは、物の何であるかを問わず、それは表現物である。それが芸術作品であるような場合は勿論のことであるが、それが衣食住の実用品である場合も、表現物であることに変りはない。母の編んだ毛糸の手袋は、わが子に対する母の愛情の表現物にほかならず、村の鍛冶屋の作った鍬は村人たちに対する彼の顧慮の表現物にほかならない。いかなる表現も行なうことなしに他者へ物を作ることは不可能である。

この点については、比較的容易に人々の同感と承認を得たいと思うのである。

作り出されたものが表現物であることを人々が認めたとしても、そのものの帯びている表現的内容と、そのものの内蔵する実用的価値とは別個のものであると、人々はやはり考えるであろう。手袋が手袋として鍬が鍬として、与えられた人によって実用的価値があるのは、そのものの「もの」としての客観的性質（鉄製であるとか、刃の部分が鍛えてあるとか）に依存する。それが愛情を表現しているとか、思いやりを表現しているとかいうこととは別のことである、と考える人々が多いであろう。しかしはたしてそうであろうか。私は、そうではなく、両者は切り離すことはできないのであり、表現が価値を生むのであり、表現内容が即ち享受者にとっての実用価値に他ならないと考えるのである。

また、抽象的に考えられた表現活動から切り離され身体運動としての労働も決して、価値を生み出しはしないし、価値でもないと考えるのである。

一人の人が努力でほかの一人の人のために物を作る、という最も簡単な場合を例にとればこのことは一番理解しやすいであろう。母の子に対する愛情の表現が無ければ、一個の手袋はこの世に作り出されるはずはなかったのである。子のためを思って羊の毛をつむぎ、編み続けた母の温情無くしては手袋の暖かさは生み出されるはずはないのである。手袋のはめ心地のよさも、丈夫さも母の思いやりなくしては出てくるはずはないのである。

大工場の高度に機械化された商品の製造過程は今のべたことをとらえ難しくはしている。しかし、企業家にも機械の製造者にも工場で働く人にも誰にも、「他者」に対して表現しかける気持ちがなかったとしたならば、いったい、価値のあるような製品が出来上がりうるものであろうか。製造過程において行われた何人かの愛情の表現、思いやりの表現、ただそれだけが製品の価値となって、それを使用する者に受け取られるのであることに間違いない。価値を生むのは、エネルギーの消費としての労働ではなく、額に汗することを持って他者に表現しかける行為としての労働である。

## 5

もし意図的につくる活動が汝のためにでなく（注３）、我のためになされるならばどうであろうか。明らかにそれは、表現活動ではあり得ない。作り出されたものは、表現物ではなくて、ただの（もの・それ）である。それは我と「汝―それ」の関係、即ち、経験的、効用的な関係におい

てあるものであって、「我－汝」的関係にあるものではない。（注４）勿論それは我以外の他者にとってはなおさら表現物ではありえない。しかし、それを作り出すに際して「無くする」ところのものは、多くの場合他者が我に差し向けた表現物であろう。汝の我によせた愛情・思いやりによって、我にとっての価値を生じたところのものであろう。したがって、我のために作る行為は、汝的なるものとしての表現物を変じて「それ」とする行為だということになる。それに反して、汝のためにつくる行為は、「それ」を転換して「汝的なるもの」とする行為である。ここに我々は、「我－汝」関係としてのものより「我―それ」におけるものへと転化する行為と、逆に、「我―それ」におけるものより「我－汝」関係としてのものへ転化する行為の二種類の行為を区別することができる。私のいう生産とは、後者のことであり、消費とは前者のことであると考える。

**6**

何びとの手にもかかわらず、何びとの恩恵によってももたらされたのでもないところの天然自然物を、加工したり採取したりして我のためにするような場合はどういうことになるのであろうか。

私は、先にのべたところの「ものの我にとっての価値とは、汝の我にさしむけた愛情、思いやりにほかならない」ということを、さらに拡充して、天然自然のものの我にとっての価値もまた汝の我に寄せた愛情であり思いやりであると考えたいと思う。汝の存在などということは疑えば疑いうる。しかし、個別的汝の存在とても疑えば疑いえるのであるから、後者のみを認めて前者を認めないのは、むしろ不公平であろう。

しかも、個別的汝の我へさしむけた愛情、思いやりが、我にとってのものの価値だということを承認する以上は、天然自然物を彼の我への表現物として差し向けている汝を認めることは（天然物も確かに我にとって価値があるのだから）理の当然であるように思われる。

以上のように、天然自然物もまた「我―汝」関係としてのものであるならば、それを転化して我のためにすることは、やはり「我―汝」のものを「我―それ」のものに変えることであり、したがって、消費だといわなければならないであろう。

**7**

ものはもともと「それ」ではなく、汝のわれわれに対する表現としてさしむけられている汝的なものであることが承認されるならば、われわれが汝のためにものを作る行為は、（注５）表現的なものにさらにわれわれの表現物を作る場合についても同様なことがいいうることは勿論である。

結局、汝の表現意図を助け、推し進める方向に向かう活動と、汝及び個別的汝の表現物を「我―それ」のそれに化す方向に向かう活動との二種の活動があることが我々に認められるであろう。前者が生産的活動であり、後者が消費的活動であることはいうまでもない。

勿論、消費的な契機もなければ、われわれ人間が生きてはいけない。他人の表現物であるパン

を食べなくてはいきてはいけない。しかし、もしその消費的な契機が、それによって得た活力によって汝への表現を行なうというような生産的な契機を一致して大きな生産活動を形成するのであるならば、それは結局、消費とはならない。

全く利己的な生活における消費、消費のための消費のみが、非生産である。

## 8

産業教育は、いま私が結論した意味における消費的生活に人を陥らせるのではなく、生産的生活へと人を導く教育であると思われる。この根本的な点を無視して、技術の訓練や技術的知識の伝達を行うことがすなわち産業教育だと考えるならば、それは決して、人を豊かにし、人々の生命を助け、生産者自らの生き甲斐を感じさせる教育とはなりえないのではないか。生産的人間に用いられてこそはじめて、技術も知識も価値あるものを作り出すことに役立つのであって、技術そのもの知識そのものは決して価値のあるものを作り出しはしない。

このようなことをいうと、あるいは、一部の人々から、「そんなことは、産業革命以前に言われるべきことであって、IT 時代にそんなことをいうのはナンセンスだ。」といわれるかもしれない。しかし、物を作る機構がいかに機械化され自動化されようと、それを動かせるのは人間であり、企画したのも人間である以上、決して時代遅れの発言ではない。自己の利害損得よりほかのことは考えないような企業家が他人を益するような企業をするはずはない。悪くすれば、他人を害し人類を破滅させるようなものの作り出しを企てるであろう。機械を発明する人間にしても、企業家に使われる人間にしても同様である。自分の利害損得しか考えないような発明家は、平気で大量秘密兵器を発明するだろうし、月給の多寡しか考えない労働者は、月給さえよければ喜んで兵器工場で働くだろう。

われわれはすでに、利己的企業家、消費的労働者の手によって作り出された、大量生産されたガラクタをつかまされたときの失望と憤りを、実にしばしば経験している。鉄筋の数が少なくセメントの量の少ないビル、砒素の入った粉ミルク、これらのものをつくるのがいったい生産といえるのか。どんな人間がこんなものをつくるのか。

しかし、ガラクタでも無害なものはまだましであろう。今やわれわれは、大量破壊兵器の製造競争という最悪の消費による危険にさらされている。魂抜きの産業教育が、かえってこの危険を増大する結果にならないとだれが保障しうるのか。

## 9・結び

われわれは、確かに現今、大学におけるインターンシップを含め産業教育を見直すべき必要に迫られている。しかし、それは、日本の社会が不況から脱出し早急に景気を回復する必要があるため、などの理由からではない。そうではなくて、今までのべきたったような、人類の危機を克服しなくてはならないからであり、一人一人の人間が本当の喜び、生産する喜びを知らねばならないからである。

また、「人類に共通する課題又は我が国社会全体にかかわる課題のうち一以上のもの」（注６）を取り上げ、授業を行うことが求められる教職総合演習では、働くことの意味を通して産業教育の正しいありかたについて考えるための材料となり得るであろう。

インターンシップを含めて正しい産業教育のありかたは、他者のために作ることの喜びを呼び覚ますことであろう。他者のためによりよくつくるために、進んで受けようとする技術的訓練であり、進んで求めようとする知識の伝達への助力である。

弟のために模型飛行機を作ってあげる喜びと結びつかないような工業教育、他者のために美味しい料理をつくることの本当の喜びなど無視した栄養学の教育は、産業教育の正しいありかたではないと思われる。

**注**

１）『新教育大事典』 第一法規出版　第三巻　三五五頁―三五七頁参照　一九九八年

２）この場合の他者とは自分自身にとってかけ替えのない他者をいう。

３）「我の為に作る活動」と「汝の為に作る活動」との関係について一言したい。同一の製造過程を反復して、すでに一度以上我々自身ないし他人によって作られたことのある同一の形のものをつくるのは、一応、我のために作る活動であって、汝のためにつくる活動でないということはできよう。一応と断ったわけは、もしわれわれがまるで機械のように、なんらの表現意欲をおこすこともなしに、製造過程を繰り返すだけなら、という但し書きが必要だからである。

４）Martin Buber: Werke. Bd.1. München, Heidelberg 1974, S.79　邦訳　マルティン・ブーバー著『我と汝』植田重雄訳　岩波文庫

マルティン・ブーバはその主著『我と汝』のなかで、「我―汝」（Ich ― Du）と「我―それ」（Ich―Es）という二つの根本語（Gurundwort）、二つの関係を区別した。

「我―汝」関係においては、我は自己の存在全体で汝に、汝の存在そのものに直接的にかかわる。それに対して「我―それ」関係においては、我は「我―汝」の直接的なかかわりから出て、汝を知覚の、認識の、欲望の対象とする。そこでは汝は汝としてではなく、「それ」として出会われる。

５）さきには「それ」を表現物に変えることであると考えた。

６）教育職員免許法施行規則第六条の備考